

今年はカーニバルの喧騒が3月にやってきます。元々ゲルマン人たちの春を呼ぶお祭でしたが、あるときからキリスト教に取り入れられ、四旬節の断食の前に行なわれる行事となりました。復活祭の前日まで続く断食に備え、一週間教会の内外で羽目を外した祝祭を繰り返し、その最後に自分たちの狼藉ぶりの責任を大きな藁人形に転嫁して、それを火あぶりにして祭りは閉幕するというのがその原初的な形だったとされています。しかし最近では華やかなパレードを「カーニバル」として言うことも多く、観光の目玉としていることもあります。今年はキリスト教歴で定められた復活祭が4月24日となっているため、例年よりも遅い3月8日がマルディグラ(脂の火曜日)となり、カーニバルの騒ぎも一層盛り上がります。さてその3月8日、実は私たちの幼稚園の卒園式の日でもあるのです。

「弥生、3月、巣立ちの時」。これまで163人が私たちの幼稚園から巣立っていきました。年少さんから入園できるのですが、3年保育を終えて卒園した園児はわずか8%しかいません。みんな駐在員の家族ですから、3年続けて在籍するのはとても難しいようです。毎年卒園を間近に控えながら帰国していく園児がいます。卒園式の練習はひと月ほど前から始まります。まず正しい姿勢で歩き、着席することから始まります。折り目正しい立ち振る舞い、綺麗なお辞儀の練習もとても大切にしています。そして着席時間も徐々に長くなり、最終的には40分間、姿勢正しく座り、人の話を聞くまでになります。40分間きちんと集中することができれば、小学校の授業時間も集中できるからです。12回目を迎える卒園式にはそれぞれ色々な思い出があります。特にお祝いの言葉をお話するとき、卒園児全員の入園したての姿が思い出されます。元気一杯に入園してきた子供、お母さんから離れられなかった子供、いつも同じお友達に引っ付いていた子供。短くて1年ほどの間ですが、みんな見違えるように成長しています。実は私は卒園式が苦手で、毎年涙を抑えるので精一杯なのです。人生に影響を与えてくれた卒業式を体験しているからなのです。

私の卒業した大阪の府立高校は、私たちが第1期生でした。入学当時は校舎も1棟だけ。運動場もなく、突貫工事で新入生が最小限使う設備だけを完成させ、入学後も工事が続くような学校でした。田んぼの上に土を入れて造成した敷地に新校舎を作っていたのですが、土地が沼地であったため、基礎のパイルは3本も4本も必要でした。6月になると窓を開けて授業が始まるのですが、その工事の騒音がうるさく、仕方なく窓を締め切り、温室のような教室での授業が続きました。雨が降ると運動場(単に田んぼの上に土を敷いて均しただけの土地)は完全に泥田状態になり、晴れても水が引くまでは使うことができない状態でした。そのため、晴れた日の体育は校舎の屋上で基礎的な運動を繰り返すだけの授業となりました。新設校であるため、学校生活は荒れていて、ほとんど毎日地元警察のパトカーが校門前に止まっていました。540人入った生徒も480人しか卒業できなかった、そんな大阪の高校でした。その高校の初代の校長先生は新しい学校の歴史を作るべく赴任されてきたのですが、先生の仕事のほとんどは生活指導の延長のようなものだったそうです。そして初めての卒業式。私たちは初代卒業生として式典に参加しました。卒業証書が渡され、校長先生の祝辞になりました。そして祝辞の途中、校長先生は感極まって絶句。搾り出すような声で「君たちは良く頑張った」とだけ言うと、会場全体から大きな拍手が沸き起こりました。教室に戻り、担任の国語の先生から頂いた言葉は今も大切に心の引き出しにしまっています。「男は夢を持って生きろ。20歳、30歳、40歳の時に何をしたいのかを考え、それに向かって生きてゆけ。そして必ず夢をつかめ」と私たちを送り出してくれました。開校当時からお世話になった体育の先生方からは「お前達には迷惑をかけてしまった。体育の授業が校庭造りになったり、仕方なく屋上や廊下を使ったりした授業になってしまった。もっとお前達を運動場で走らせてやりたかった。だから、卒業しても、自分の庭と思っていつでも遊びに来い」という言葉を頂きました。新設校の一期生ということで、私たちは他の人たちが手にすることの難しい、大きな思いを母校から頂いたと今も思っています。残念ながら2年前、母校は併合され、母校の名前は消えてしまいました。それでもその思い出だけは一緒にいた者全てが共有していると思います。

《続く》